

長野県における砂防ボランティアによる 防災教育の展開について

長野県 建設部 砂防課 地すべり係 すずき しょういち 鈴木 祥一

1. はじめに

長野県は、東西約 120 km、南北約 212 km と県土が広く、その約 8 割が山地となっています。また、急峻な地勢と脆弱な地質により、多くの土砂災害が過去発生しています。

県内には、災害にまつわる多くの伝説があり、長野県立歴史館長 笹本正治氏は、その中で「赤牛伝説」を調べ、土石流災害への忠告であるとしています。

ここでは、地域に根差し土砂災害等に対する防災教育の講師を「赤牛先生」と呼ぶこととし、地域の防災力向上を目的とした取り組みを行います(写真-1)。



写真-1 中学生を対象とした防災教育

ものではないため、住民の災害経験・教訓は時間の経過とともに薄らぎ、風化していきます。平成 30 年 7 月豪雨において、平成 26 年 8 月豪雨を経験した広島県を中心とした西日本地方で、再び尊い人命が失われました。一方、その教訓を生かし地域の防災体制を強化した結果、適時的確な避難行動を行い、人的被害を防いだ地域がありました。

2. 近年の状況

近年の地球温暖化に伴う気象状況の変化により、過去経験したことのない豪雨が頻発しています。平成の時代はまさに、災害の頻発化、激甚化が顕著な状況となり、土砂災害、洪水災害により多くの人的被害がもたらされました。

防災教育の必要性が謳われ、「自らの命は自らが守る」自助の取り組みがされていますが、一向にその被害は後を絶ちません。

災害は、定期的に日本全国に万遍なく発生する

3. 現状の課題

防災教育による地域の防災体制、地域防災力の強化はソフト対策として確実に効果はありますが、問題はローラー展開的にかつ、継続的な取り組みができるかが課題です。国の中央防災会議「平成 30 年 7 月豪雨による水害・土砂災害からの避難に関するワーキンググループ」の報告の中でも、避難に対する基本姿勢の中で「突発的に発生する激甚な災害への行政主導型のハード対策・ソ

フト対策に限界」とされており、行政からのトップダウン型の取り組みより、住民一人一人が水害・土砂災害を「我が事として捉える防災意識」を醸成し、ボトムアップ型の取り組みを展開することが重要であると考えます。

しかし、行政にはマンパワーが不足しており、地域の取り組みの「きっかけ」作りはできても、その後の継続的な取り組みのフォローが不足しているのが現状です。

そこで、会員数全国1位を誇る「長野県砂防ボランティア協会」と連携し、地域での防災教育を展開する取り組みを今年度より行います。

4. 長野県砂防ボランティア協会の紹介

平成7年の阪神・淡路大震災を契機に、土砂災害に携わる技術者の必要性が認識され、砂防事業に携わった行政OB、地質コンサルタント技術者等により、全国で砂防ボランティア協会が組織されました(図-1)。

長野県砂防ボランティア協会は、平成8年に設立され、災害時の砂防施設・危険箇所の緊急点検、平常時の土砂災害危険箇所パトロール(写真-2)、土砂災害に対する知識の普及・啓発、歴史的砂防施設(重要文化財等)の維持管理活動に取り組んでいます。平成21年には、長野県と「土砂災害時における緊急応援に関する協定」を締結

しました。

平成26年の長野県木曾郡南木曾町の土石流災害、神城断層地震の際に、県との協定に基づき実施した土砂災害危険箇所点検活動が、二次災害防止に対しての功績が顕著だとして、平成28年9月に、防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞しました。これは、砂防ボランティア団体として全国初の受賞でした。



写真-2 土砂災害危険箇所点検パトロール

5. 地域の防災教育への講師派遣

県内の砂防ボランティア協会会員は、全県にくまなくおり、その地域の災害特性を理解し、豊富な経験を有しています。災害時最も重要なのは「自らの命は自らが守る」行動を取ることです。そのためには、適時的確な避難行動を行うため、

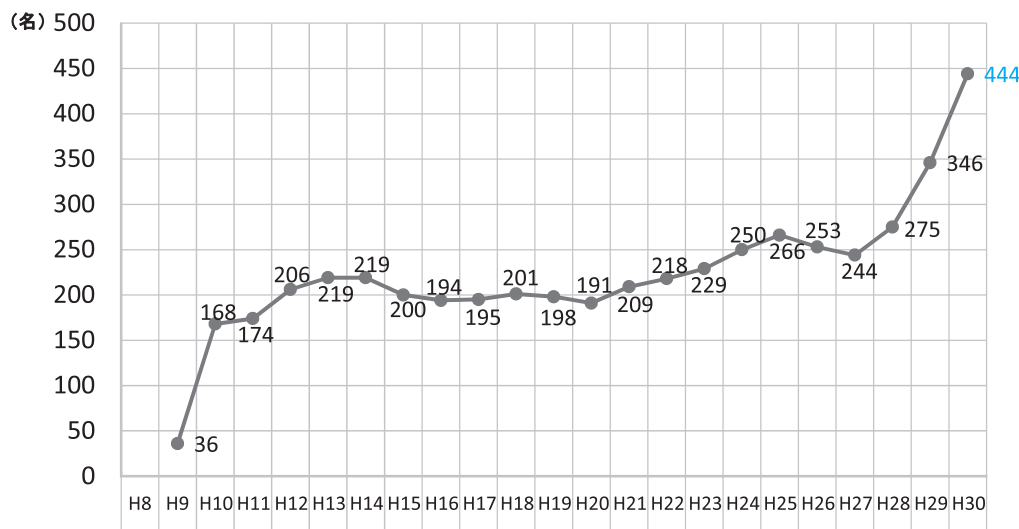


図-1 長野県砂防ボランティア協会会員数他の推移

正しい知識を持たなければなりません。行政から発信されるあらゆる警戒避難情報の意味を正しく理解し、避難行動に結びつけることが重要です。しかし、近年の災害の検証で避難すべき状況で「逃げない住民」がいることが問題となっています。

そこで、その地域の固有の災害履歴、形態等を歴史や地理・地形、地名から説明し、地域の災害リスクを正しく理解し、自らのこととして考え防災対策の必要性を感じてもらうため、自発的に行えるような防災教育を目指します。

例えば、長野県の方言で「蛇抜け」があります。土石流が流下した後に溪流が削り取られた光景を、大蛇が怒り狂い、山から下り降りた様に似ていることから、そのように呼ぶと聞いたことがあります。溪流の名前も県内各地に「蛇抜沢」と呼ばれるものがあり、これは、過去土石流が発生したことを意味します。また同じように「押出沢」も土砂が押し出したことを意味します。地名の由来には、災害にちなんだものも多く、それらの意味を災害伝承として地域の赤牛先生が防災教育の一助となります。

また、過去の災害を伝承する碑が県内各地にあります。南木曾町の「蛇抜けの碑」(写真-3)には「白い雨が降るとぬける 尾先谷口宮の前雨に風が加わると危い 長雨後谷の水が急に止つたらぬける 蛇ぬけの水は黒い 蛇ぬけの前には



写真-3 蛇抜けの碑

きな臭い匂いがする」と記されています。まさに、降雨時の土石流発生を警戒する内容です。これらの防災教育について、地域の公民館活動と連携し、より効率的な展開の方法を今後検討していきます。

また、各地域の防災意識には差があり、その地域のレベルに合わせた内容も検討していかなければなりません。継続的に行うために一過性の取り組みではなく、住民の多様なニーズに応えながら防災教育を行うことが大切だと考えています。

6. 組織基盤の強化

長野県砂防ボランティア協会は、令和元年より特定非営利活動法人(以下、「NPO 法人」という)として活動を行えるよう現在準備を進めています。

法人化については、近年の会員数の増加に対応することに加え、組織基盤を強化し、任意団体として行ってきた活動を、さらに充実させ将来にわたり持続的な活動を行っていくため、NPO 法人格を取得することが最適であると考えました。

法人化することによって、組織の発展・強化が可能となり、災害の歴史を風化させない取り組みとしての災害伝承、防災教育等の啓発活動および、災害時の危険箇所パトロール等を行うことで、県民の皆様の安全、安心の確保に努め、広く社会に貢献できると考えています。

7. おわりに

災害の頻発化、激甚化から命を守るための防災体制の強化に、砂防ボランティアはさまざまな可能性を秘めています。行政と連携し、地域での土砂災害啓発活動、防災教育がより充実するよう今後も取り組んでまいります。